

～「体験が人を育てる」一日一日が貴重な可能性の毎日～ 学校法人 日本社会事業大学附属子ども学園



発達に遅れやつまずきのある子どもや、その保護者をサポートする日本社会事業大学附属子ども学園

市民 パルタージ

このコーナーでは、市内在住の市民編集委員が清瀬に関連する施設や事業者を巡って、清瀬の特徴を紹介いたします。



市民編集委員

高橋玲子さん
(上清戸在住・会社員)

知的障害児教育の創始者として有名なフランスのろう学校医ジャン・イタルは、「体験は人を育てる」と言いました。学校法人日本社会事業大学附属子ども学園では、イタルのその言葉を理念にして、発達に遅れやつまずきのある子どもたちに遊びや体験、学習を行っています。毎年秋には、家族遠足で井の頭公園に行きます。障害のある子どもを連れて出かけることは苦勞も多くありますが、一緒に歩いた経験がおとなに対する信頼につながります。今回は、卒業後もその子どもと家族を長く見守り続ける「日本社会事業大学附属子ども学園」の佐藤美由紀園長にお話を伺いました。

知的障害児をサポートする支援センター

子ども学園は知的障害に特化した大学附属施設として、研究成果を生かした教育を実践しています。知的障害児にとって早期に教育的な視点を持った支援を行うことは、大変重要なことです。



今回お話を伺った佐藤園長(写真右)。「体験が人を育てる」のパネルとともに(写真左はパネルのアップ)

都内各地からの通園

子ども学園は清瀬市にあります。が、定員30人中清瀬市内からの通園は約3分の1で、東村山・東久

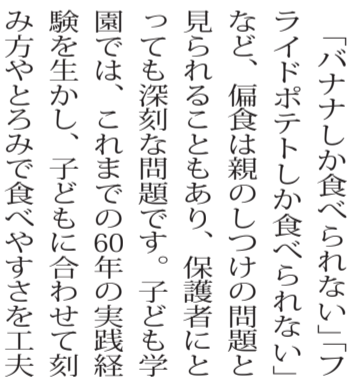
留米・練馬・武蔵村山・東和・国分寺・国立など、都内各地からの通園があります。

遠方から通う保護者は、午前10時に登園して午後2時に降園するまでの4時間、園内で児童を待っていることもあるため、園内には控室が設けられています。冷蔵庫や電子レンジを完備し、くつろげるソファや書籍もあり、毎日の登園に付き添う保護者への温かな配慮が伺えます。

「見通し」を持てるようにサポート

粘土遊び・お絵かき・リズム遊び・お散歩・外遊びなど日々の活動と、運動会・遠足・クリスマス会・餅つきなどの年間行事は、一般的な幼稚園の活動とほぼ同じですが、子ども学園では「専門家に よる講演会」「学習会」「ペアレント・トレーニング」「同窓会活動」など、家族に対する支援に特徴があります。

年3回の「学習会」では、子ども学園を卒業し、現在小学校・中学校・高等学校に通う子どもの保護者に直接話を聞くことができます。それぞれ違う子どもたちが、卒業後どのような生活を送っているのか、具体的な生活の様子を聞くことができます。



保護者が待機する控室。ソファや書籍などが完備されている



子どもたちお気に入りの遊戯室

また、将来働くことができるだけでは、生きる喜びを実感するのは難しいので、自分自身の楽しみを見つけて「余暇」の時間を持つこともとても大切です。スイミング・ボウリング・ドラム・卓球・絵画など、幼いころからあきらめずに可能性を広げてあげることが、国体でメダルを取るような選手に成長する子もいます。

偏食は1年間で必ず治る

子ども学園では、園内の給食室で作られたできたての給食を提供しています。発達障害のある子どもの場合、感覚過敏を伴うことが多く、偏食になりやすい傾向があります。食べ物の味や形状に対する感覚が極めて敏感なので、慣れないものを食べるのは大変な苦痛を伴うそうです。

「バナナしか食べられない」「フライドポテトしか食べられない」など、偏食は親のしつけの問題と見られることもあり、保護者にとっても深刻な問題です。子ども学園では、これまでの60年の実践経験を生かし、子どもに合わせて刻み方やとろみで食べやすさを工夫

し、季節の食材と栄養バランスを考慮したメニューで食べることができるように促しています。「1年間で偏食は必ず治ります」と佐藤園長は力強くお話しくださいました。

1日1日が貴重な可能性の毎日

1歳を過ぎたら歩き始め、2歳頃には話し始め、3歳ではおむつが外れる。というようなおおよその成長の流れが、子ども学園の子どもには当てはまらないことが多いです。保護者にとっては非常に不安になるところですが、発達段階に合わせてスマールステップの課題を設定し、ゆっくりながらも確かな成長を促しています。

一日一日を大切に、その成長の可能性に気付き伸ばしてあげることが、その後の成長に大きな意味を持ちます。子ども学園の職員にとつては、毎日が成長の芽生えを発見するとても大切な日です。そんな職員の方々が喜びを感じるのは、「いたる学園」以来80人以上の卒業生とのつながりのなかで、卒業後5年、10年、15年経ち、成長した子どもたちに会える時だといえます。

また、「子どもたちを通して、決して容易ではない子育てをやり



さまざまな遊びを通して、子どもたちの興味や関心を育てる

遂げている、素晴らしい家族に出会えることが、最大の喜びです」と、佐藤園長は話されます。

障害のある子が輝くまちに

「この子らを世の光に」とは、知的障害のある子どもの福祉と教育に従事し、障害者福祉の父とも呼ばれた故・糸賀一雄氏の言葉です。「何の打算もなく清らかに生きていく障害のある子どもが輝く世の中」「障害を恥じずにそれでも良いと認めてくれる世の中」。それは、一般の人々にとつても住みよい世の中であることではないでしょうか。

「福祉のまち・清瀬市は、障害のある子どもも輝くまちであると思う。そんなまちになってほしい」と、佐藤園長は、大学と子ども学園が所在する清瀬についてそう語り、そのために子ども学園としても地域の子どもたちへより良い支援をしていきたいと話されました。

子ども学園は、清瀬市の指定を受け、指定障害児相談支援事業者として、相談支援も行っています。相互に手をつなぎ、協力することで、福祉のまち・清瀬の多くの方がより輝きを増すのではないのでしょうか。

取材を終えて

障害があってもなくても、それぞれの子どもがそれぞれの良さを発揮しながら成長し、暮らしているのまちなちです。改めて思いました。「手をつなぎ、心をつむぐ、みどりの清瀬」が、しみじみと心に染み込みました。